

# 3

## ドボクから土木へ 魅了する土木



八馬 智  
HACHIMA Satoshi

千葉工業大学工学部デザイン科学科  
准教授

土木鑑賞を趣味とする愛好家は、土木の風景のどのようなところに魅力を感じているのか。また、風景の「その先」に感じている魅力とは何か。そして、土木技術者はそういった愛好家とどう向き合っていくべきなのか…。

### 異邦人による風景の再発見

つい最近、出張で金沢を訪問した際に、たった6席の狭小寿司店で食事をした。端の人がトイレに行くには全員が一旦店外に出なくてはならないので、いきおい他のお客さんとの会話が弾む。筆者は2組の常連客と、なぜか土木トークで大いに盛り上がった。一方はインフラに対する一般市民の認識について、もう一方はダムのかっこよさについて。

翌朝、彼らとの会話に登場した市内を流れる「用水」を、武家屋敷群そっちのけで辿ってみた。観光客など皆無の住宅地で夢中に写真を撮っている筆者を不思議に思っか、初老のご婦人に声をかけられ

た。市内を流れる用水に興味があることを伝えると、かつての姿や小さな橋の変化など、うれしそうに教えてくださった。

こうした会話が成り立つのは、幼少期より用水の重要性をたたき込まれている土地柄のためかもしれない。しかし、たとえば東京都内で同じような観察行動をしても、最近では「ああ『タモリ倶楽部』だね」とか、「『工場萌え』みたいなもの?」と、苦笑いが混じりながらも穏やかに受け入れられることが多くなってきた気がする。少し前までは、あからさまに訝しがられたり、時には職務質問されることすらあったのに。

筆者はかつて10年近く建設コンサルタントに勤務したが、その後10年近く大学でデザインを専門に研究・教育を行っており、すでに土木のプロとは言えない中途半端な立場である。土木構造物が作り出す風景を相変わらず偏愛しており、趣味なのか専門なのかの区別がつかない状況である。自ずと土木に魅了されている人々との交流が生まれ、近年の土木鑑賞の盛り上がりや世間が好事家に対して寛容になっていく様子を間近で実感してきた。

筆者が知る土木愛好家の多くは、「蛇口をひねると水が出る」「スイッチを入れると明かりが灯る」「多少の雨では水浸しにならない」など、「あたりまえ」と思われている事柄を「考えてみると不思議」と感じるメンタリティーを持っている

る。土木とは無縁の仕事をしている「異邦人」の彼らは、世間では無意識のレベルにまで浸透しているインフラの風景を、新鮮な眼差しで続々と「再発見」している。まさに赤瀬川原平らによる路上観察学会が言う「その価値をつくるのが発見者である。つまり鑑賞者の私たちだ<sup>1)</sup>」という行為が、対象を変えて繰り返されているのだ。いまやその視線は一般にも緩やかに広がりはじめ、それを受け入れる寛容さが社会にも生まれてきているのだと考えられる。

### 「土木鑑賞」という趣味

我が国において、長大橋梁などの特別なプロジェクトを除く無名性の高い土木の風景が、アートの視線から本格的に世に送り出されたのは、1990年代の半ば以降と考えられる<sup>2)</sup>。数名の写真家の手により、砂防施設、地下空間、工事現場など、いわば日常の外にある風景を扱った写真集が断続的に出版されたのである。また、建築系雑誌『SD(スペースデザイン)』により、テクノロジーが生み出す新たな風景の価値を「テクノスケープ」という概念によって取りまとめられたのもこの時期である<sup>3)</sup>。

それからおよそ10年を経た2007年、写真家でも専門家でもない土木愛好家たちが、まるで示し合わせたかのように、小さな判型のガイドブックのような写真集を出版しはじめた。その数年前から「景観の美醜のありよう」が論じられていたことに呼応するように、一部の価値観では「悪い景観」として位置づけられるような被写体も扱っていることも注目に値する。

この現象の背景には、ネットやデジカメに代表されるデジタルテクノロジーの発達がある。著者たちはインターネット黎明期から電子掲示板などで情報をやりとりし、デジカメによる記録写真をアーカイブする個人サイトを立ち上げていた<sup>4)</sup>。そこではアートやアカデミズムなどに求められる作法などは全く関係なく、どうすれば自分の興味を他人に見てもらい、その面白さを共有できるかが模索されていた。そうした気運が出版社や編集者を巻き込み、一気にリアルな書籍の出版という方向に表出したと考えられる。

やがて「土木鑑賞」という趣味は、佐藤らによって「リサーチ・エンタテインメント」と位置づけられ、社会的にシリアスな鑑賞対象を扱いながらも、あえて「浮かれた鑑賞者」であることが宣言され

た<sup>5)</sup>。こうして、送り手側も受け手側も渾然一体となってコミュニケーションを図ることができるカジュアルな雰囲気構築され、さらには「タモリ倶楽部」などに代表されるマスメディアの情報発信効果も重なり、ますます土木の風景に興味を持つ人が増えてきたと考えられる。

### 表層にある面白さ

土木愛好家は、土木の風景にどのような魅力を感じているのだろうか。そもそも没頭しているものに対して、好きな理由を明確にすることは難しい。様々な要素に触発されて複雑に絡み合った感情が、「好き」や「萌え」などの表現で口をつくのだろう。

本稿では研究者というスタンスからそうした感情を分析すべきなのかもしれないが、土木愛好家のひとりとしての実感から、風景の表層に現れる面白さに関する個別の要素を、おこがましいと感じつつも思いつくままに並べてみる。

#### ● 時空のスーパースケール

人間社会のためにつくられているはずの土木構造物は、強大な自然の力を相手にするために、ちっぽけな人間の存在はお構いなしになってしまう。その暴力的にまでダイナミックな姿を見た人間は、自分の居場所の無さに途方に暮れてしまう。そうした一方的なコミュニケーションの断絶が、敬意と畏怖の対象となるのだろう。それは、人の一生よりもずっと長い時間のスケールで捉えても、同様のことが言える。

#### ● 機能優先の造形

エンジニアリングを極めた結果として生み出された



写真1 人間の存在を意に介さないスーパースケール



写真2 力学や施工性を追求した結果としての造形





写真3 オーダーメイドによるバリエーション



写真4 要素のくり返しによる秩序

形態は、人の視線をそれほど意図していない場合であっても、時にセクシーであり、面白さをもたらし、美しさを感じることもある。そこには理性に裏打ちされたリアリティが発する、確かな説得力があるためだろう。そこに意図的に美しさを付与したものは、感動体験を与えるまでに昇華することがあるが、押しつけがましさを感じさせるものは逆効果となってしまう。

#### ● 豊富なバリエーション

土木構造物はすべてが同じ条件となることはまずないために、結果的に同じ外観のものがほとんどないという状況が生まれる。つまり、その場所にカスタマイズされた一品生産のオーダーメイドなのである。このことは、「コレクション」という欲求をあおりたてる。愛好家は構造物そのものを所有することはできないので、現地に赴くか写真によってコレクションするのである。

#### ● 秩序と混沌

土木構造物では単調なものが規則的に反復されて全体が構成されることがある。一定のリズムによって脳がしびれるような魅力は、宗教音楽やテクノミュージックの感覚に近い。しかし、大小様々な秩序が蓄積した状態においては、観点のスケールを変えたときに、極めて複雑な構成になっていることに気付く。エンジニアリングとしては正しいはずなのに、カオスの様相を呈して全体像を理解することができないという未知の不安が、面白さとなって感じられることもある。



写真5 結果的に生まれた混沌

#### ● コントラスト

相反する要素同士の組み合わせは、意外性やインパクトを伴って好意的に受け入れられることがある。たとえば静と動、自然と人工、伝統と革新、大胆と繊細など。こうしたギャップや違和感は、奥行きのある多面的な見方が可能となることから、驚きやワクワク感をもたらす。

#### 風景のその先

対象に対する理解の程度が進むにつれて、外観の「鑑賞」だけでは飽き足らなくなる土木愛好家も出現している。彼らは、風景の向こう側にあるコンテキストを読み取ろうとする。そうして見えないものが見えるようになる楽しさを味わっているのだ。ここで



写真6 自然の地形と交通の造形とのコントラスト



写真7 形の謎解き

は彼らとの交流によって得られた観点をいくつか提示する。

#### ● システム全体の概観

土木愛好家の興味の対象は、構造物だけにとどまらない。たとえば水門が気になる人は、その役割を調べるうちに、やがて防潮システムに踏み込む。ダムが気になる人は、堤防や遊水池を含めた治水システムにまで踏み込むばかりか、台風時にはリアルタイムでハイドログラフを見ながら、ダムの連係プレーを応援する人までいる。ダム湖に溜まる土砂が気になると、砂防システムに踏み込む。国道を巡る人たちは、その成り立ちを調べるうちに、国土計画に踏み込む。もはや、目に見えているものはただの入り口であり、その先の高度に管理されたシステム全体にまで彼らの興味が広がっている。

#### ● 形の謎解き

土木愛好家は、土木構造物の個々の形が様々な条件をクリアするよう合目的に選択されていることを理解している。このため、特殊な状況に置かれた構造物を見ると、彼らは仕組みや理由を知るだけでなく、時代背景や設計者の意図まで読み取ろうと、様々な知識や情報を駆使して推測を試みる。つまり、「どうやって問題を解決したか」というストーリーを読み解くプロセス自体を楽しむのだ。

#### ● 大人の事情

謎解きを試みても、なかなか腑に落ちない問題に突き当たることも多い。事実上、政治的な事情、関係者の見識不足や怠慢、調整不足などのつくる側の問題が、意味不明の生々しいノイズとなって表面に現れることもある。そうした場合でも土木愛好家は直情的に糾弾せず、揶揄するコメントを添えつつもおお

らかに見守ることが多い。むしろ、こうした不可解なものを見守ることに喜びを感じている節もある。

#### エンターテイメントとしての土木景観

土木鑑賞という趣味は、価値観が多様化する現代社会において、実用物たる土木構造物にもっと多様な価値を見出してみようという酔狂な趣味である。現状ではマイナーなジャンルであるがゆえに、アナークの割合も多いと考えられる。

一方、土木業界とエンドユーザーたる市民との間に不可欠なものは「信頼」であり、それをこれからどのように育てていくかは極めて重要な課題である。そのために土木関係者は、以前にも増して市民感覚が多様化している事実をしっかり受け止めつつ、柔軟な思考を持たなければならない。それぞれがオリジナリティのあるユニークな観点を持ち、エンターテイメントとしての表現力や発信力を持つ土木愛好家の存在は、土木関係者にとってバランスの良い観点を得るための刺激になるだろう。

しかし、彼らの言動に過剰に惑わされてはいけない。エンジニアは自信を持って対象のクオリティを高めることが本来の役割であり、それが実現しやすい仕組みを構築しなければならない。なにしろ土木愛好家は不可解で隙のある物件を手ぐすね引いて待っているのだから、うっかりするとエンターテイメントの格好の餌食となってしまう。

#### <参考文献>

- 1) 尾辻克彦・赤瀬川原平:東京路上探検記 新潮文庫 1989
- 2) 八馬智:ドボク趣味の形成と位置付け 土木技術 vol.68 no.1 2013
- 3) 宇野求、岡河貢ほか:特集「テクノスケープ:テクノロジーの風景」 SD9504 鹿島出版会 No.367 1995
- 4) 大山頭:工場 メディアファクトリー 2012
- 5) ドボク・サミット実行委員会編:ドボク・サミット 武蔵野美術大学出版局 2009